



TITLE:

研究会に出席して(ひろば)

AUTHOR(S):

川崎, 辰夫

---

CITATION:

川崎, 辰夫. 研究会に出席して(ひろば). 物性研究 1965, 4(1): 76-77

ISSUE DATE:

1965-04-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/85701>

RIGHT:

ひろば

第三に大学の慣行についていえば、物性研は共同利用研として新しくつくられたものであるから、今までの大学の慣行とは別な共同利用研の慣行をつくって共同利用の便を図るべきである。研究会、外来研究については、大学院学生も参加しているのであるから、共同利用施設専門委に大学院学生を入れないというのは、互にその態度が矛盾している。第四に、仮に学生が制度的に運営に関与できないとしても、共同利用施設専門委は、その任務が共同利用施設の経費運用に関する物性研の所員会の諮問機関であるから、運営に関して直接の責任をもたないはずで、それ故に大学院学生を委員にしても差しつかえはないはずである。現にこれと同じ性格の基研の研究部員会は、大学院学生でも委員にしている。

物性若手グループとしては、以上の理由によつて徳永氏をオヴザーヴァーでなく正式の委員にする様、物性研、物小委に要望します。

## 研究会に出席して

川崎 辰夫（京大理）

これは、「二次相転移及び不可逆過程の基礎理論研究会報告（物性研究 3-6）」を読んでの感想である。

京都に住んでいた為に、旅費の必配をせずに5日間出席出来た。そういわねばならない程基研、物性研での研究会に、他の土地より、若手（特に大学院DC学生）が出席することは（勇気がいるだけのこともあるが）一般にむづかしい。曾田さんも述べられているように、或程度出来上つた仕事をもつていて発表する場合を除くと、研究会費用の制約などから出席しにくいことがしばしばある。研究会の性格によつては、当面する分野での第一線に活躍される方々がその研究を深める為に排他的会合を開く必要がある場合もあるだろう。しかし今回の研究会に限れば、世話人の意図がどうあれ、発表、討論された内容から判断すると、或程度物性基礎論グループのサロンの会合になつた日もあつたように

思われる。この様な研究会では、どのような人がどのような態度でどのような問題にとりくんでいるか、現在の関心事は何辺にあるか、等を知るよい機会に恵まれる。若手がこの種の研究会に出席出来ることは望ましいに相違ない。我々若手は今まであまりに研究会に応募することをためらいすぎたのではなからうか。もつと勇気を出して我々は押しかけてゆくべきであり、世のおじいさまおにいさま方が若手育成のお膳立してくれるのを待つという手はあるまい。又そんなあわい期待をせぬのが我が身の為だろう。出来得れば、発表しなければ旅費が出にくいといった研究会の数をへらしてほしい。

或るえらいさんは、若手ばかりで研究会を計画したら、という。私の考えでは、勉強会的なものは可能だと思うが、研究を主とした会合を若手ばかりでひらくのはあまり意味がないと思う。

勉強会的な面からは、今年日本でも Summer School がひらかれようとしている。若手研究者の養成交流に果す役割の大なるを思う時、この企画が一部の人々による informal なものになつてしまつたことは全く残念である。何故もつと早く物理学会の正式機関にはかつて formal なものとして発足し得なかつたのであろうか。一日も早く不明朗な空気をぬぐい去り、常設の若手育成組織の一つとしてほしい。

研究会的な面では、聞くところによると、10人以下の小研究会では、若手の育成ということを特に意識せずにうまくやつていそうである。将来の研究会の方向としてはなるべくこの種の小研究会の数を増してほしい。今回のようなサロンの集まりは年一回位残しておくのも悪くないように思う。そこには学会出席では得られない厚みがあると思うからである。

思うに今まで我々若手がいささかだらしがなかつたといつては言過ぎであらうか。こんなことを書くといささか後めいた気がする。それは「お前はろくな研究もせず一人前の口をきく」と批判されされることである。

勿論一言もない。